

5. コロンビアの体質 9

天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

今回も8月号に引き続き、コロンビア人の国民的性格を見ていきたい。

*日和見主義

この気質はコロンビア特有というより、ラテン・アメリカ全般に言えることではないか、と感じている。なぜ感じたかという武道(空手道)を通してその一部を体験したからである。

ご存じの通り、日和見主義というのは「形勢や状況を見て、自分の都合の良い側につくという態度」。つまり、自分の精神や言葉に一貫性がなく、周りの都合にとらわれて行動することであり、類語には御都合主義、機会主義がある。「えっ、これは日本人が多いのでは？」と思う人もいるかもしれない。

「先生！(筆者の事。空手界では一応師範なのです、ハイ)、先生の流派で黒帯を取りたいんですが…」という若者が数人いた。彼らはよその道場の生徒であり、たまたま私が親切さを出して教えたのが縁のはじまりだった。自分たちの道場主とは仲が良くないらしく、そこで日本人先生の道場で黒帯を取る方が「箔がつく」。つまり権威付けができて都合が良いと判断したようだった。状況(形勢)を見て得になる方を選択する、ということだ。

弟子レベルならまだしも、あるメキシコの道場の師範から、「あなたの流派に所属したい」と道場の流派変更を依頼され、返答に困った事があった。なぜなら、たとえ状況が悪かろうが仲が悪かろうが、最高師範(各流派の最高の責任指導者)がどんなに裁量不足だろうが、空手道の世界では最高師範は親であり弟子は子供である。つまり、流派の所属関係と各道場との関係は疑似家族なのである。だから、よほどの事が無い限り「親」を変えることはない。その点、上記のように自分の都合で条件が良い所が変わるといえるのは、日和見主義そのものであろう。

コロンビアでは、日和見主義が現在よく見られる場所は会社関係である。良い所に就職したい、一度就職しても、他に良い働き口があれば転職したい、とは誰でも考えることである。ラジオのニュースを聞いていたら、「就職は基本的に、各個人の持っている技量や才能ではなく、《てこ》による影響が大きいんだよ！」⁽¹⁾と言っていた。この《てこ》はスペイン語で Palanca(パランカ)と言い、コネの事だ。コネは全世界に存在すると思うが、コロンビアでとりわけ、権力を動かす道具である。

こういった状況を見て上手く立ち振る舞う、なんとか自分のために活用したり利益を上げたり、優勢な方へ自分を持っていったりすることは、前回は述べたように、長年の「植民地」時代の伝統からの「解放」だと考える。そこには一貫性は少ない。

* ユーモアと風刺・あざける「ママガジスモ」

さて、コロンビア人は本質的に「ユーモア」のセンスがよい。というか、大概の人は会話の中でユーモアを活用する。単純に人を笑わせる、その場を和ませるのは伝統的に上手である。その理由の一つにコロンビアの国情がある。

「すべてを笑いの傾向に持っていく、逆境や不運、災難が多い国のなかで、外国人がびっくりしたり、失望させたりしないための有益な属性、ユーモア、冗談好きということがとりあげられる。」⁽³⁾

都会よりも地方、特に海岸(カリブ海)地方の人たちが冗談好きであり、小話の宝庫である。とはいうものの、このユーモア、色々な種類がある。その中で「ママガジスモ」という、人を笑わせる「お笑い」の冗談ではなく、物事を真剣に捉えるのではなく、少々ふざけたり、どちらかといえば、ブラックユーモア的な、風刺、からかい、あざけりに近い、コロンビア特有のユーモアが存在する。また「ママガジスモ」は、自分が何か失敗(遅延や物忘れなど)の時に相手を煙にまいたり、時間を稼いだりという作用もあるらしい。⁽⁴⁾時には、この手の冗談は人を傷つけたり、小馬鹿にしたりして人権問題にも拡がることもあるそうだ。

調べるとコロンビアだけではなく、ベネズエラ、エクアドルにも中米にも存在するという。しかし、各地方でママガジスモはニュアンスが異なるらしい。コロンビアでは首都ボゴタや前述のカリブ海沿岸の人たちがよく使用しているという。

ママガジスモは「Mamar gallo」(ママル・ガージョ)からの派生した言葉であり、Mamarは「乳を飲む」、galloは「雄鳥」の意味だ。由来は諸説あるが、闘鶏からきている説が有力である。コロンビアの闘鶏について、やはりカリブ海の沿岸は「闘鶏国際大会」も開かれているほど盛んである。試合のラウンドの前に鶏のトレーナーが自分の鶏の頭を吸って、フラフラにさせたところで、開始のゴング。そうすると鶏は酔っているのか相手の攻撃をかわしやすいのだそう。負けた相手のトレーナーが「ママンド・ガージョしよった(雄鳥を吸いやがったな)」⁽⁵⁾というところから来ているらしい。中米では性的な意味があるとか(ここでは触れないことにする)。

この「ママガジスモ」をする人のことを「ママガジスタ」という。コロンビアの有名なママガジスタはノーベル文学賞を受賞したガブリエル・ガルシア・マルケス(以下愛称のガボを使用)である。彼もカリブ海に面するマグダレーナ県の内陸の町、アラカタカ出身である。

2012年5月中旬、ガブリエル・ガルシア・マルケスの死亡説が流れた。それはイタリアの作家ウンベルト・エーコのツイッターの偽のアカウントから拡散し、そこにはガボの家族とライバル作家のマリオ・バルガスリョサから確認された出来事になっていた。数日後、ガボは中指を立てて、その偽りニュースを否定し、笑顔で写真を撮った。

私自身、何人ものコロンビア人に「ママル・ガージョって何？」と聞くのだが、「お前みたいな奴だよ」。さらに実地調査が必要だと感じる。

[註]

- (1) 「カラコルニュース」2021年2月24日(FM90.5Hz)より。
- (2) Germán Puyana, *Cómo somos Los Colombianos*, Panamericana Pub Llc, 2006: 82.
- (3) 原語では「mamagallista」。
- (4) "Publicado originalmente en la Revista Diners N. 98, de mayo 1968" https://revistadiners.com.co/cultura/archivo/56763_el-mamagallismo-segun-daniel-samper-pizano/
- (5) "Conoce el origen de la expresión 'mamar gallo', ¿es sexual?" <https://www.caracol.com/venga-le-digo/capitulos/conoce-el-origen-de-la-expresion-mamar-gallo-es-sexual>